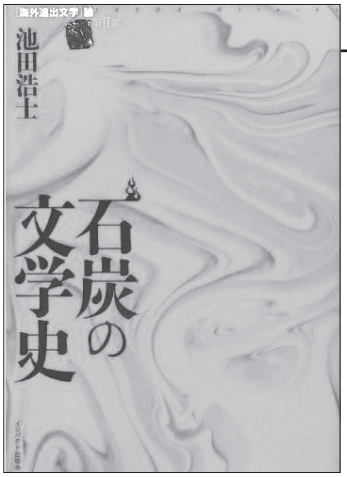
『石炭の文学史』

池田浩士著、インパクト出版会、
2012年9月、6000円＋税

天野 恵一



忘年会の席で、おもしろい事態に遭遇した。アレコレ、ワイワイ、バカ騒ぎの中に「ネェー、その勤評闘争ってなんだったの?」という質問が飛び出した時、私は思わず「石川達三の『人間の壁』を読んだら」と対応しようと、そう言いかかったら、旧べ平連の老人二人（会の共同代表である吉川勇一と本野義雄）がほぼ同時に、『人間の壁』をすすめたのである。私は、この『朝日新聞』の連載小説（1958～59年）、後にベストセラーとなったそれを、二人のように同時代に読んでいたわけではない。後の時間に読んだ私は、この教師は「聖職」であるという意識に支えられた「日教組」教員の「進歩的」闘いの記録ともいえる小説を、まるごと肯定的には読めなかった。

しかし、「勤評闘争」について知りたいという人があらわれれば、年表的な知識などでかたづけずに、まずこのフィクションの持つ人間的リアリティーにふれる方が、運動理解としては、まともだと考え続けてきたのだ。だから、まず小説（フィクション）をすすめる二人の姿勢に、私と共通する判断を感じて苦笑した（ついでに、これは映画化もされている。私は映画の方が先であった）。

池田浩士の大作『石炭の文学史』の書評を、こんなエピソードで書き出したのには、わけがある。フィクションとノンフィクションそして歴史（実証史という意味でのそれ）の垣根を取っ払って、事実（真実）にせまるという本書の方法が、すみずみまで一貫している点にこそ、私は本当に驚かされたからだ。著者にとって、この方法を貫くからこそ、それは「文学史」であるようなのだ。

この池田の方法に、強い共感を示した彦坂諦は、本書の書評（「石炭にかかわるすべてのひとびとの生の軌跡を再構成して語る」『運動〈経験〉』36号所収）で、それを「文学史的手法による実証的研究」と名づけ（これは鮎川信夫が彦坂の仕事を評して使った言葉らしい）、いわゆる歴史研究者とはまったく別のこの方法について、以下のように語っている。

「文学的手法とはなにか?：文学作品とは、なによりもまず、ひとりの生きた人間、顔も名もある切れば血の出る人間に関心を集中させることによってはじめてできあがるものです。まさにこのやりかたを、池田は、この本を書くという営為のなかでつらぬきとおしています」。

地獄の労働を生き、生きさせられる人びとの一人一人の具体的状況への具体的関心。フィクション（小説）の主人公たちも歴史の登場人物である。しかし、ここに書かれた〈歴史〉は、いわゆる歴史実証を無視するという方向とは、まったく逆ベクトルの精神で書かれている。それは、実証史学者たち以上に文字通り膨大な実証的な資料がフルに駆使されている事実に、そのことはよく示されている。この点に、私も彦坂同様に、ある「驚き」を感じた。もう一点、この池田の作業を通して、私が強く実感させられたのは（この点もすでに彦坂がふれているが）、原発が「民営」（資本が主役）に見えて、実は戦後日本国家の問答無用の「国策」であったことは、〈3・11〉以後の今、あまりにも明らかであるが、実はエネルギー政策は、石炭の時代から国民国家日本の一貫した「国策」であり続けているという大きな事実である。

侵略戦争下、植民地支配した国々の労働者を広く動員した炭坑労働の歴史は、今、大量にうみだされ続けている原発での被ばく労働の現在へと、そのまま連続しているのだ。池田はこの本を、以下の文章で締めくくっている。

「破滅的な原発事故のあと、石炭は、地球温暖化の加速を始めとするさまざまな弊害にもかかわらず、まだその生命を閉じることができない。日本における石炭は、重要な労働力を国外から移入することによって経済産業が成り立っているのと同様に、外国からの輸入によって新たな一生に歩を踏み入れている。だが、この新しい一生は、嫁支度が整うよりさきに生命を燃え尽きさせたキクエたちや、三たび海峡を渡らねばならなかった河時根たちや、炭塵爆発による一酸化炭素中毒の後遺症とともに生きなければならない炭鉱労働者たちや、サハリンの炭坑で地獄の苦しみを強いられた呂泰水たちや、そして生まれ変わる時は馬車馬になりたいという夢を語った元・女坑夫の老婆たちの、長い歴史の上にのみ存在する。／石炭の一生と向き合うということは、その新しい一生が始まっているいまもなお、あらためて事故の歴史的責任と向き合うことなのである」（傍線引用者。「キクエ」とは橋本英吉の小説『嫁支度』に登場する人物、「河時根（ハージクン）」は帚木蓬生の『三たびの海峡』の登場人物である。さらに、「呂泰水」は島田荘司の小説『奇想、天を動かす』の登場人物である）。あらためて「自己の歴史的責任と向き合い」、国民国家（と資本）の歴史的責任と対峙する作業へ向けて、本書を手にされんことを。

（あまの・やすかず／本誌編集委員）